

特別寄稿

「特別活動」・「総合的な学習の時間」における 主体的・対話的な学びを促す教育方法

沼 田 潤・長谷川 精 一

〈1〉学習指導要領改訂の方向性： 「特別活動」・「総合的な学習の時間」 に関して

小学校・中学校の学習指導要領が2017年に改訂され、高等学校の学習指導要領は2018年に改訂される。今回の学習指導要領の改訂の背景として指摘されているのは、人工知能の飛躍的な進化に例示されるような急速な社会の変化である。これからの学校教育においては、子どもたちが社会の変化に積極的に向き合い、他者との協働を通して諸課題を解決しながら、より良い社会や人生の創り手となる力を身につけていくような指導が重要となる¹⁾。

今後の社会を担う子どもたちに求められる力を育む上でどのような学びが求められているのかという点に関しては、「主体的な学び」と「対話的な学び」ということが指摘されている。「主体的な学び」とは、学習内容と自らの生活とに関連性をもたせ、自己のキャリア形成の方向性と関連づけすることにより、学びに興味・関心をもたせ、自ら積極的に考え、判断をしていくことを促そうとする学びである。そして、「対話的な学び」とは、児童生徒どうしの議論や、教員や地域の人々との対話を通して新たな考え方に気づき、自らの考えを広げ深めようと

する学びを指す。そして、各教科で身に付けた資質・能力を活用し、現実の諸課題の解決を目指す「特別活動」及び「総合的な学習の時間」における「主体的・対話的な学び」を通して能動的に学び続けながら、新しい社会を創造していくとする態度を獲得させることが今後ますます求められる²⁾。

今回の学習指導要領改訂によって、「特別活動」に新しい視点が導入された。その1つ目の視点が「人間関係形成」である。集団の中で人間関係をより良いものへと形成するという視点で、属性や考え方などの違いを理解した上で認め合い、互いの良さをいかすような人間関係の形成が求められる。2つ目の視点が「社会参画」である。より良い学級・学校生活づくりなど、集団や社会に参画して様々な問題を解決することが目指される。3つ目の視点が「自己実現」である。集団の中で現在や将来の自己の生活課題を発見し取り組むことが求められ、自己理解を深め、自己の可能性を生かし、自己の在り方・生き方を考えていくことが重視される。これら3つの視点を重視した「特別活動」の展開が今後いっそう求められていく³⁾。

「総合的な学習の時間」における学びの特徴は、問題解決的な学習活動が発展的に繰り返されていく、探究的な学びにある。実社会や実生活における課題を見つけ、その課題に関する情

報を収集し、その情報を整理・分析したり、考えを出し合ったりしながら問題解決に取り組み、明らかになったことからまた新たな課題を見つけ、さらなる課題の探究を始めるという学びである。「総合的な学習の時間」における探究課題は、国際理解や情報、環境、福祉・健康といった社会の変化に伴って意識されるようになってきた現代社会の諸課題、町づくりや伝統文化、防災といった各地域や各学校に固有な諸課題、進路を切り開く力の育成と関連のある自己の生き方や進路について考えるという課題が挙げられ、これら諸課題を科目横断的に探求し続けていくことが重視されている⁴⁾。

〈2〉「総合的な学習の時間」における国際理解教育：その実践における留意点

それでは、具体的な事例として「総合的な学習の時間」に行われる国際理解の教育実践に目を向けて、現在行われている実践の問題点、及び、今後の実践における方向性に関して考えていきたい。国際理解の探求課題の例として、「地域に暮らす外国人とその人たちが大切にしている文化や価値観」が挙げられる⁵⁾。児童生徒が暮らす地域の外国人の文化や価値観を学ぶことが探求課題の例として取り上げられているが、学校によってその取り組みには違いがある。

植木（2008）は、「総合的な学習の時間」における国際理解に関する実践内容を「外国の文化や習慣の調べ学習」、「地域に住む外国人との交流」、「外国語学習」、「地球規模の諸問題の学習」の4つに分類している⁶⁾。「外国の文化や習慣の調べ学習」は、図書やインターネットを用いて、外国の文化・習慣を調べて、発表会の形式をもってまとめるという学習活動である。

「地域に住む外国人との交流」は、留学生や地域に住む外国人との交流で、外国の歌、踊り、ゲームを楽しんだり、外国料理を作ったりする取り組みである。異文化を知る上で、まず言語が大切であるという発想から、「外国語学習」も重視されているという。最後に、「地球規模の諸問題の学習」は環境や貧困といった諸問題の学習であり、NGO 職員や青年海外協力隊として外国で働いた人を招いた講演等が行われている。

「総合的な学習の時間」の時間における国際理解に関する実践内容は、「楽しむ」「親しむ」「良さを知る」ことが特に重視されていて、その学びを通して得られたことを多文化共生にどのように生かしていくかという探求活動はあまり注目されていない（小澤（2001））⁷⁾。異文化を持つ他者との間に生じる葛藤に向き合いながら、互いを尊重し、互いに違いがあるということを前提として理解し合おうとする関係性の構築が多文化共生が求められる時代において欠かせないが、そのような関係性の構築を目指していく上で、「総合的な学習の時間」における「主体的・対話的な学び」が必要であると考えられる。

「主体的・対話的な学び」を深める国際理解の教育実践の例として、日本社会における国際結婚をテーマとした実践が考えられる。この実践は、事前学習、授業におけるディベート、及び、ディスカッションによって構成することが有効であろう。事前学習では、生徒各自が日本における国際結婚について調べ、さらに国際結婚についてどう思うか家族や友人に尋ねるという学習活動に取り組むことで、国際結婚の現状、国際結婚に対して様々な考え方があることを理解する。次に、事前学習をふまえて、「国際結婚を積極的に認めていくべきか」をテーマ

に、賛成派と反対派に分かれてディベートを行う。そして、ディベートで述べられた両者の主張をもとに、「国際結婚を推奨することの是非」をテーマとしてディスカッションを行う。さらに、国際結婚を含む外国人の受け入れ問題を「他人事」ではない「自分事」として引き受けるための仕掛けとして、「恋人が外国人であるが、親がその交際を認めない場合」に、どのように考え、行動するかを考えてもらう。将来のパートナーが外国人である可能性は今後は増えていくことを踏まえて、想像力を働かせて考えるように促す。このように、外国人の受け入れ問題が「他人事」で済まされるものではないことに気づき、異文化との共生が自らの問題として受け止められるように促していくことが、今後の「総合的な学習の時間」における国際理解の教育実践において重要であると考えられる。

〈3〉改訂学習指導要領における 「特別活動」、「総合的な学習の時間」 と道徳教育との関係

上記のように、改訂学習指導要領（2017年）においては、「特別活動」に関して、「様々な集団での活動を通して、自治的能力や主権者として積極的に社会参画する力を重視するため、学校や学級の課題を見だし、よりよく解決するため、話し合って合意形成し実践することや、主体的に組織をつくり、役割分担して協力し合うことの重要性を明確化する」⁸⁾とされ、「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の「3つの視点」が挙げられている。自分と他者との関係、自分と社会との関係、自分とその自分を振り返って内省する自分との関係について、生徒が主体的に考え、自分なりの「答え」を探していく過程が重視されているのである。

また、改訂学習指導要領においては、「総合的な学習の時間」に関して、中学校における目標として、「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする」（高等学校に関しては、最後の部分を「自己の在り方生き方を考える」とする）とされ、学習活動の課題として、中高ともに、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、及び、生徒の興味・関心に基づく課題、また、中学校では、地域や学校の特徴に応じた課題、及び、職業や自己の将来に関する課題、高等学校では、自己の在り方生き方や進路について考察する課題を挙げて、「問題の解決や探究活動の過程」即ち、生徒が主体的に考え、自分なりの「答え」を探していく過程が重視されているのである⁹⁾。

これらに対して、「特別の教科 道徳」においては、「価値項目」、「内容項目」が「A 主として自分自身に関すること」、「B 主として人との関わりに関すること」、「C 主として集団や社会との関わりに関すること」、「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」という「4つの視点」のもとに提示されている。各視点における各項目は以下のとおりである。A:「自主、自律」、「自由と責任」、「節度、節制」、「向上心、個性の伸長」、B:「思いやり、感謝」、「礼儀」、「友情、信頼」、「相互理解、寛容」。C:「遵法精神」、「公德心」、「公正、公平、社会正義」、「社会参画、公共の精神」、「勤労」、「家族愛、家庭生活の充実」、「よりよい学校生活、集団生活の充実」、

「郷土の伝統と文化の尊重」、「郷土を愛する態度」、「我が国の伝統と文化の尊重」、「国を愛する態度」、「国際理解、国際貢献」。D:「生命の尊さ」、「自然愛護」、「感動、畏敬の念」、「よりよく生きる喜び」¹⁰⁾。

この「価値項目」、「内容項目」に関しては次のような主張がある。「特別の教科道徳で一つ一つの内容項目にある価値意識をしっかりと育んでいくとともに、トータルに自分をしっかりと見つめられるようにすることが大切です」¹¹⁾。「価値を注ぎ込むのではなく、一人一人の価値観を育てるのが道徳教育です。子どもが自発的に価値観を育てる窓口が、価値項目なのです。そうして自分の中で積み上げられた価値が道徳性となるのです。道徳ではそれを応援するために、さまざまな価値のろうそくに火をともします」¹²⁾。「ここであらためて、読み物資料を使った道徳の授業の意味を考え直してみましようと言いたいです。読み物資料は、ファイルしておけばいつでもどこでも見返すことができますし、資料をもとにいつでも自らを振り返ることができます」¹³⁾。「読み物資料には「近い」と「遠い」ものがあります。「遠い」もののほど心にいつまでも残ります。遠い資料はあこがれとなり夢となる部分もあるのです。先人の伝記とか、伝統や文化、自然、スポーツのヒーローなど、あこがれや夢があって心を動かすような資料を使うといいのではないかと思います」¹⁴⁾。

しかし、「価値を注ぎ込むのではな」というこのような言説とは裏腹に、「特別の教科道徳」においては、上でみた「特別活動」や「総合的な学習の時間」の場合とは異なり、生徒が主体的に考え、自分なりの「答え」を探していく過程を重視するということではなく、既定の「内容項目にある価値意識をしっかりと育んでいく」ことが主張されている。「読み物資

料」についてはこれまで、生徒の興味・関心を引き起こさない「徳目主義」¹⁵⁾に陥りやすいという指摘がなされてきたが、先に正しい「答え」があり、それを生徒に内面化させるという方法論ではなく、「特別活動」や「総合的な学習の時間」に関して示されている「主体的・対話的で深い学び」を目指すための方法論を開発していくことが必要である。

〈4〉主体的・対話的な学び

それでは、主体的・対話的な学びはいかにして可能となるのだろうか。道徳教育の領域には、例えば、ジレンマ教材を用いた実践や、道徳性の発達段階に関する理論を採り入れた実践の蓄積がある。これらの蓄積も活用しつつ、「特別活動」、「総合的な学習の時間」、道徳教育、さらには、各教科も含めた学校教育全体において、LTD (Learning Through Discussion)、Think-Pair-Share、PBL (Problem Based Learning)、バズ・セッションなど、対話を重視した教育方法や、ディベート、ロール・プレイング、グループ・ワークなど、能動的な学びを引き出す様々な方法上の工夫が可能であり、さらには、人類史の長い時間の中で析出され確認されてきた、真に「普遍的」な価値とはどのようなものなのか¹⁶⁾、というテーマで討議することによって critical thinking (批判的思考) の力を育んでいくという方法が可能であろう。そのような実践により、他者から与えられたものではない自分自身の価値観が形成されていくのではないだろうか。そのための具体的な方法上の「仕掛け」について考察することを、今後の課題としたい。

註

- 1) 「中学校学習指導要領解説 総則編」1頁。
2017年7月、文部科学省。
- 2) 同上、77頁。
- 3) 「中学校学習指導要領解説 特別活動編」12-13頁。2017年7月、文部科学省。
- 4) 「中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」9-10頁、67-69頁。2017年7月、文部科学省。
- 5) 同上、70頁。
- 6) 植木節子「教科における『国際理解教育』の可能性」『千葉大学教育学部研究紀要』56、2008年、195-199頁。
- 7) 小澤理恵子「異文化間トランスの〈耐性〉と〈寛容さ〉について」『異文化間教育』15、2001年、31-52頁。
- 8) 「中学校学習指導要領解説 特別活動編」6頁。2017年7月、文部科学省
- 9) 「中学校学習指導要領」144頁、145頁、2017年7月、文部科学省。「高等学習指導要領」292頁、2009年3月、文部科学省。
- 10) 同上、139頁。
- 11) 「道徳と人格形成」(諸富祥彦、梶田叡一編『これからの学校教育を語ろうじゃないか 学校における人格形成と育てたい資質・能力』、図書文化社、2015年、116頁。
- 12) 同上、117頁。
- 13) 同上、118頁。
- 14) 同上、118頁。
- 15) 初代文部大臣・森有礼は元田永孚らによる「徳目主義」的な修身教育論を批判した。森有礼の教育思想については、長谷川精一『森有礼における国民的主体の形成』、思文閣出版、2007年、を参照されたい。
- 16) そのような価値として、人権、平和、民主主義、人種主義をはじめとするあらゆる差別の否定、マイノリティの意見の尊重、共生といったことがらが想起されるであろう。